

令和6年（2024年）職場における熱中症による 死傷災害(休業4日以上)の発生状況

＜神奈川県労働局管内 令和7年1月31日時点速報値＞

1 熱中症による死傷者数の推移

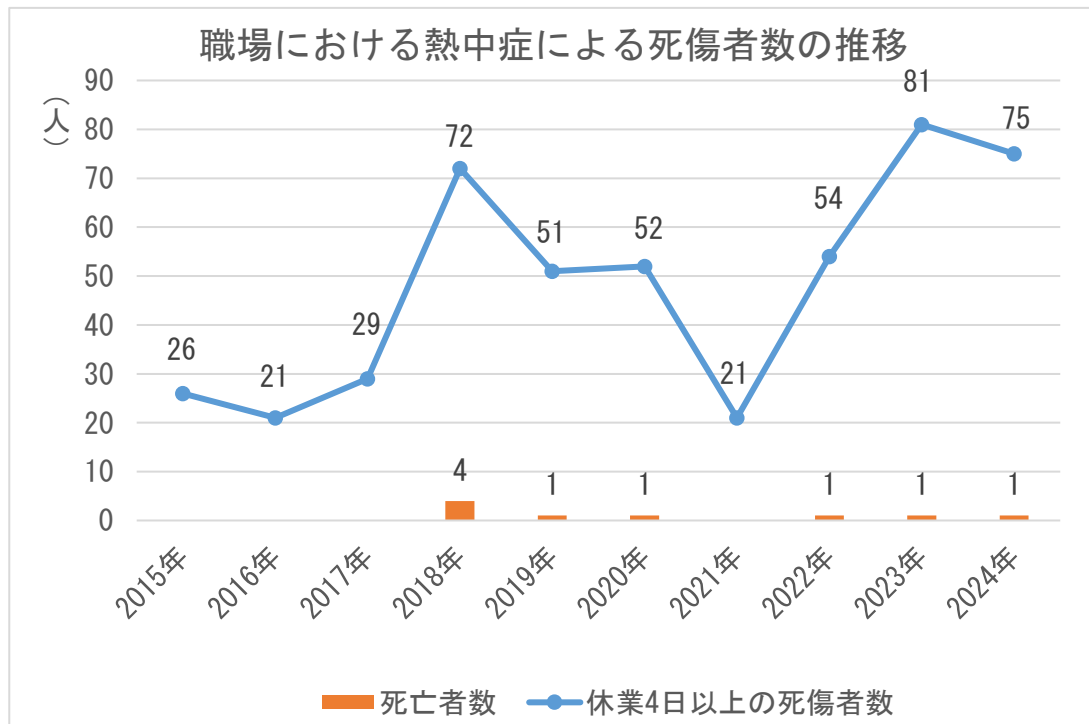
過去10年間の熱中症による死亡者及び休業4日以上の上業務上疾病者の数（以下合わせて「死傷者数」という。）は、以下のとおりである。

令和6年（2024年）の死傷者数は75人と、前年に比べ減少したものの、過去10年間では2番目に多い結果となった。また、死亡災害も3年続けて発生した。なお、以下各表・グラフの数値は、2023年までは確定値である。

職場における熱中症による死傷者数の推移（人）

2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
26 (0)	21 (0)	29 (0)	72 (4)	51 (1)	52 (1)	21 (0)	54 (1)	81 (1)	75 (1)

※（ ）内の数値は死亡者数であり、死傷者数の内数である。



2 業種別発生状況

過去5年間（2020～2024年）の業種別の熱中症の死傷者数をみると、最も多いのは建設業と、運輸交通業に貨物取扱業を合わせた運送業が並び、これに、製造業、警備業などが続いている。

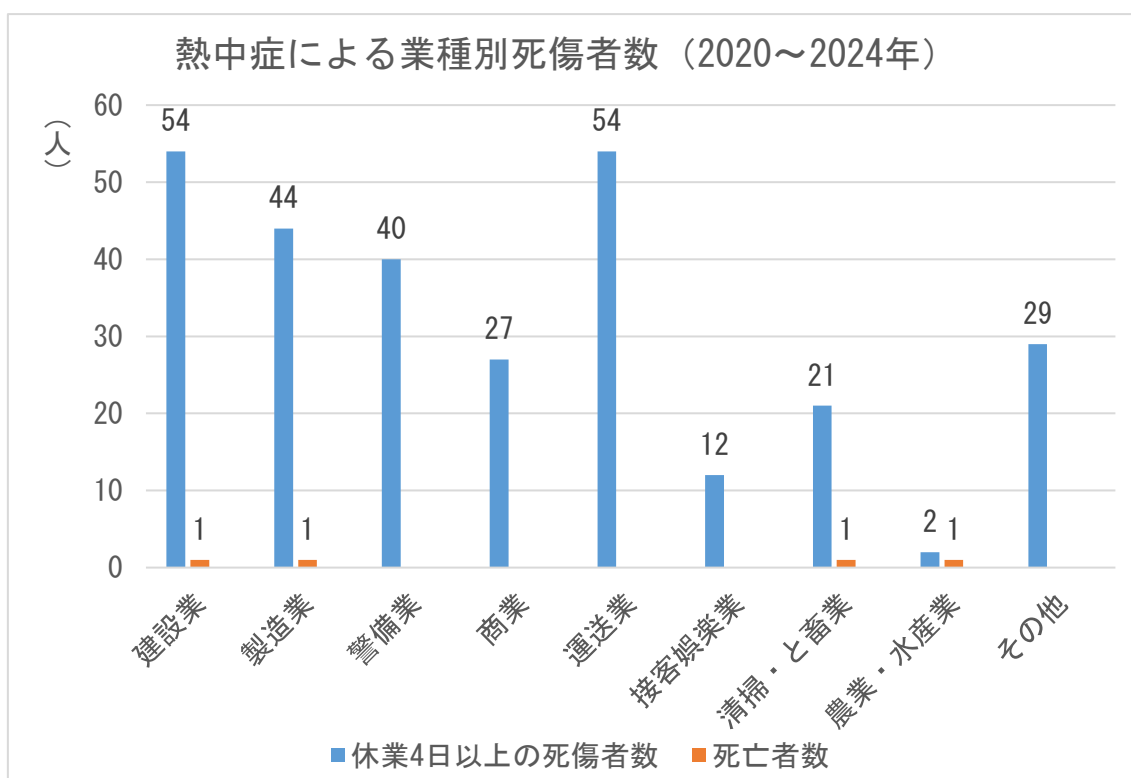
なお、警備業における熱中症災害の大半は、建設工事現場での交通誘導業務におけるものである。

令和6年（2024年）は、運送業の死傷者が15人で2年連続して最多業種となった。また、多発業種の死傷者が減少する中、警備業はほぼ倍増し、2年ぶりに二桁の死傷者となった。

熱中症による死傷者数の業種別の状況（2020～2024年）（人）

	建設業	製造業	警備業	商業	運送業	接客 娯楽業	清掃・ と畜業	農業・ 水産業	その他	計
2020年	9 (0)	5 (0)	7 (0)	3 (0)	10 (0)	1 (0)	7 (1)	1 (0)	9 (0)	52 (1)
2021年	3 (0)	5 (0)	4 (0)	1 (0)	3 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	3 (0)	21 (0)
2022年	11 (1)	7 (0)	12 (0)	8 (0)	7 (0)	3 (0)	4 (0)	0 (0)	2 (0)	54 (1)
2023年	18 (0)	17 (0)	6 (0)	6 (0)	19 (0)	3 (0)	3 (0)	1 (1)	8 (0)	81 (1)
2024年	13 (0)	10 (1)	11 (0)	9 (0)	15 (0)	4 (0)	6 (0)	0 (0)	7 (0)	75 (1)
計	54 (1)	44 (1)	40 (0)	27 (0)	54 (0)	12 (0)	21 (1)	2 (1)	29 (0)	283 (4)

※（ ）内の数値は死亡者数であり、死傷者数の内数である。



3 月・時間帯別発生状況

(1) 月別発生状況

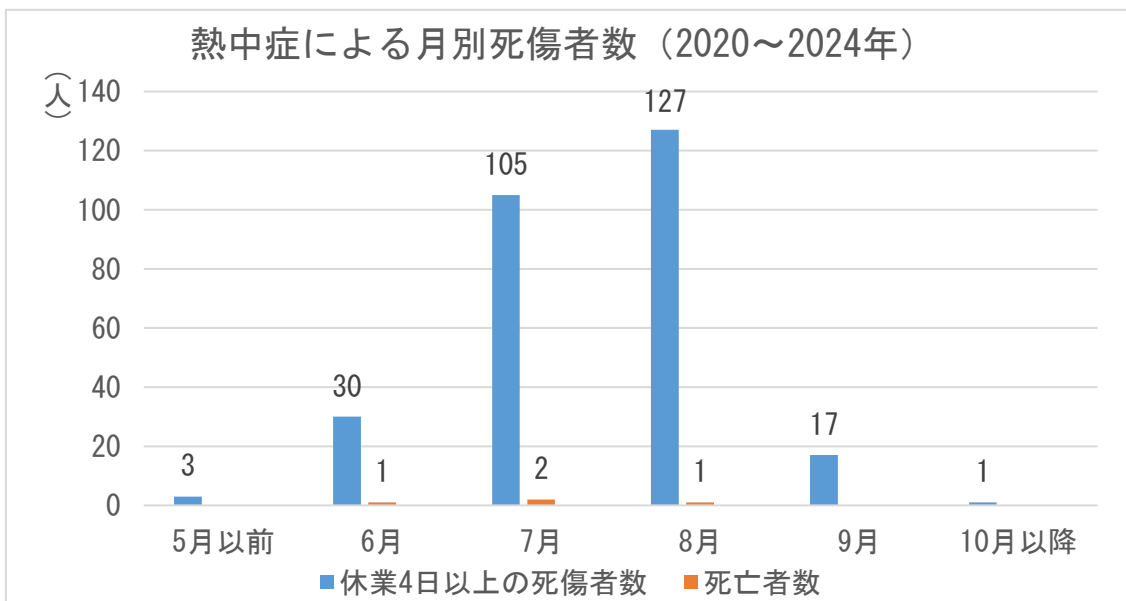
2020年以降の月別の熱中症の死傷者数をみると、全体の半数弱が8月に発生し、これに7月発生分を合わせると全体の8割を超えている。また、死亡災害4件は6月から8月に発生している。

令和6年(2024年)は、過去5年間の傾向同様に7月、8月に集中しているが、過去5年間では初めて7月の死傷者数が半数を超え最多となり、8月の約2倍となった。死亡災害も7月に発生している。最も早い災害の発生は6月上旬で、最も遅いものは9月中旬であった。

熱中症による死傷者数の月別の状況(2020~2024年)(人)

	5月以前	6月	7月	8月	9月	10月以降	計
2020年	1 (0)	4 (0)	6 (0)	34 (1)	6 (0)	1 (0)	52 (1)
2021年	0 (0)	1 (0)	6 (0)	13 (0)	1 (0)	0 (0)	21 (0)
2022年	1 (0)	17 (1)	14 (0)	20 (0)	2 (0)	0 (0)	54 (1)
2023年	1 (0)	6 (0)	34 (1)	37 (0)	3 (0)	0 (0)	81 (1)
2024年	0 (0)	2 (0)	45 (1)	23 (0)	5 (0)	0 (0)	75 (1)
計	3 (0)	30 (1)	105 (2)	127 (1)	17 (0)	1 (0)	283 (4)

※ () 内の数値は死亡者数であり、死傷者数の内数である。



(2) 時間帯別発生状況

2020年以降の時間帯別の死傷者数をみると、11時台で最も多く発生しているが、日中だけではなく9時台以前及び18時台以降にも多数発生している。また、日中の現場作業終了後に会社事務所に戻ってから、又は帰宅してから体調が急変・悪化したというケースも散見される。

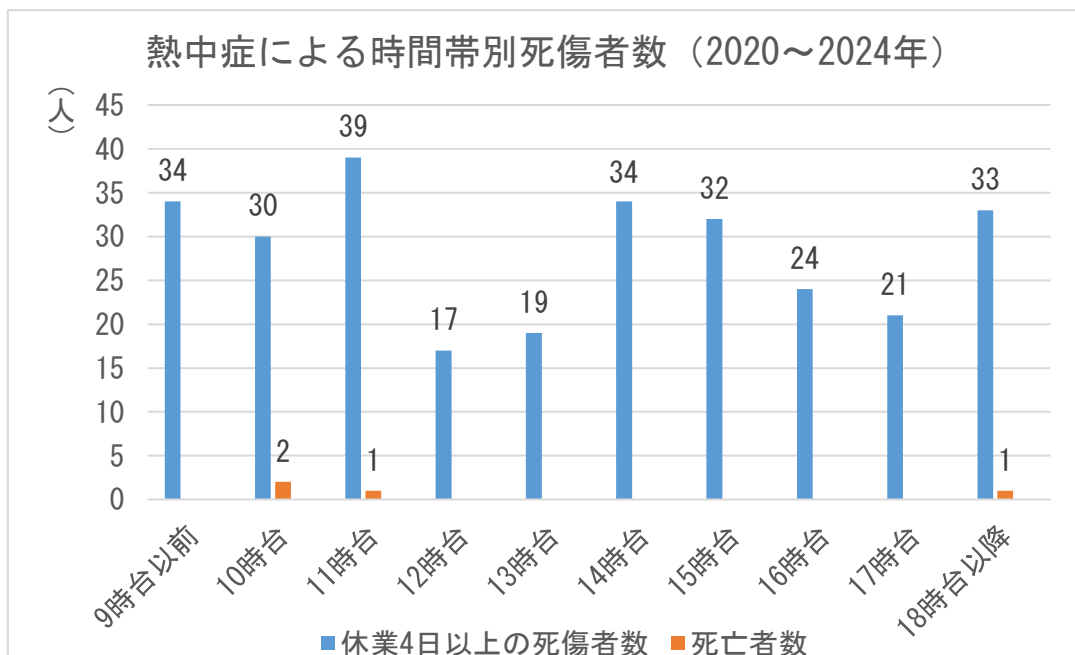
令和6年（2024年）は、10時台の発生が最も多かったが、9時台以前が続いており、比較的涼しい時間帯でも油断できない状況が続いている。

熱中症による死傷者数の時間帯別の状況（2020～2024年）（人）

	9時台以前	10時台	11時台	12時台	13時台	14時台	15時台	16時台	17時台	18時台以降	計
2020年	3 (0)	3 (0)	7 (0)	3 (0)	3 (0)	7 (0)	7 (0)	5 (0)	5 (0)	9 (1)	52 (1)
2021年	0 (0)	3 (0)	4 (0)	3 (0)	1 (0)	0 (0)	2 (0)	2 (0)	3 (0)	3 (0)	21 (0)
2022年	11 (0)	5 (1)	6 (0)	0 (0)	4 (0)	10 (0)	8 (0)	2 (0)	2 (0)	6 (0)	54 (1)
2023年	10 (0)	6 (0)	13 (1)	8 (0)	6 (0)	8 (0)	7 (0)	9 (0)	4 (0)	10 (0)	81 (1)
2024年	10 (0)	13 (1)	9 (0)	3 (0)	5 (0)	9 (0)	8 (0)	6 (0)	7 (0)	5 (0)	75 (1)
計	34 (0)	30 (2)	39 (1)	17 (0)	19 (0)	34 (0)	32 (0)	24 (0)	21 (0)	33 (1)	283 (4)

※ 9時台以前は0時台～9時台、18時台以降は18時台～23時台を指す。

※ () 内の数値は死亡者数であり、死傷者数の内数である。



4 令和6年（2024年）の熱中症による死傷災害の特徴

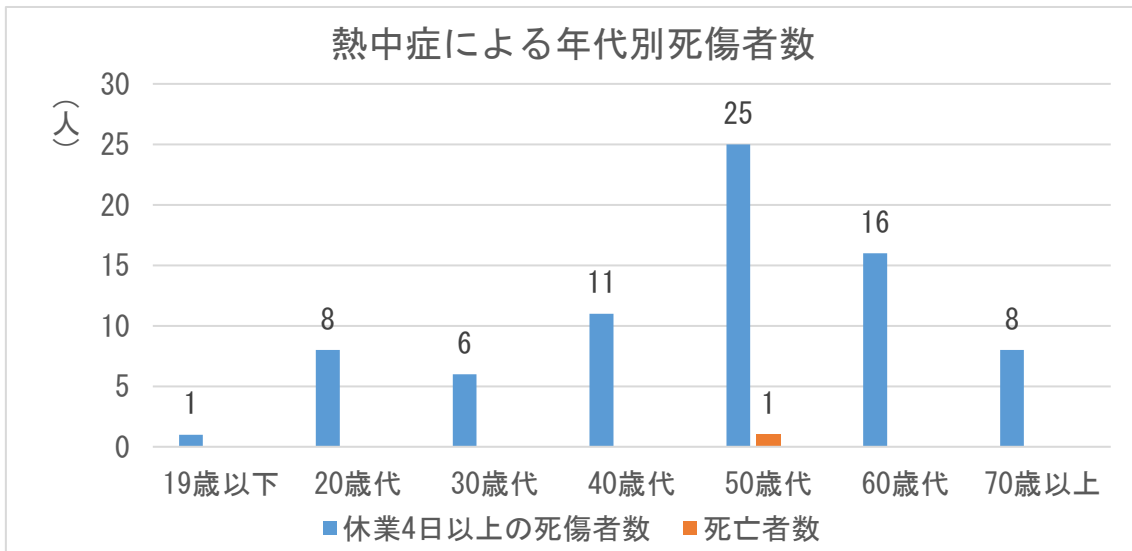
（1）年代別の発生状況

年代別の死傷者数をみると、例年、50歳以上の被災者の割合が全体の5割を超える状況が続いていたが、この割合は増加傾向にあり、令和6年は被災者のほぼ2/3が50歳代以上となった。

熱中症による死傷者数の年代別の状況（人）

	19歳以下	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上	計
死傷者数（人）	1	8	6	11	25(1)	16	8	75(1)
割合（%）	1.3	10.7	8.0	14.7	33.3	21.3	10.7	100.0

※（ ）内の数値は死亡者数であり、死傷者数の内数である



（2）屋外作業・屋内作業別の発症状況

令和6年の熱中症罹患時の屋外・屋内作業別の死傷者数をみると、屋外作業が50人、屋内作業が25人であった。屋外作業が主体である建設業及び運輸交通業の災害件数が減少する中、同じく屋外作業が主体である警備業の災害件数が増加したことから、屋外作業か屋内作業かの作業別発生状況の割合は2対1と、前年と同程度であった。

屋外作業での多発業種は、最多は建設業で、警備業、運輸交通業と続き、屋内作業では、製造業、商業、貨物取扱業の順となっている。

令和6年にあっても、熱中症災害全体の1/3は屋内作業において発生しており、炉や厨房等といった特別な熱源がなくても、窓等がないかあっても締め切っているといった部屋や倉庫等の通風が不十分で高温多湿になるおそれの高い環境下において、災害発生の危険性が高くなっている。

屋外作業はもとより、屋内作業においても、暑さ指数の把握、休憩の確保、水分及び塩分の摂取等熱中症予防対策にしっかり取り組むことが肝要である。

5 令和2年（2020年）以降の熱中症による死亡災害の概要

番号	発生年月 発生時刻	業種 事業場規模	起因物 事故の型	発生概要
1	令和2年 8月 18時頃	清掃・と畜 （産業廃棄物 処理業） 50名～99名	高温、低温環境 高温・低温の 物との接触	夏休み明けの初日、焼却炉を稼働する準備作業において、高温環境下で、炉内の補修材をミキサーで練る作業をしていたところ、泡を吹いて心停止状態で倒れていたのを同僚に発見された。（熱中症）
2	令和4年 6月 10時頃	建築工事業 ～9名	高温、低温環境 高温・低温の 物との接触	2階建て木造住宅の外部足場を約1時間かけて解体後に、熱中症による体調不良となり病院へ搬送されたが、十数日後に死亡した。 発症時は気温31.7℃、湿度59パーセント（WBGT値27℃相当）であった。 被災者は入社以降の現場作業が通算3日目であった。
3	令和5年 7月 12時頃	農業 ～9名	高温、低温環境 高温・低温の 物との接触	被災者は、10時の休憩明けから、スポーツ施設敷地内で剪定等の植栽管理作業を一人で行っていた。休憩まで一緒に作業をしていた代表者が現場に戻り、倒れている被災者を発見、救急搬送されたが、熱中症により死亡した。
4	令和6年 7月 10時頃	その他の製造業 （クリーニング 業） 100名～299名	高温、低温環境 高温・低温の 物との接触	被災者は、工場内で作業中、体調が悪くなり、熱中症の疑いがあったことから病院に搬送された。 診察の結果、脱水症状及び血圧低下の診断を受け入院したが、翌日の朝、熱中症を原因とした急性心筋梗塞で死亡した。